

# 秋田の風

日銀秋田支店長コラム

先日、東京の京橋にあるアキタコアベース（秋田県が昨年10月に設けた移住・就職相談施設を訪ねた。少し狭めたが木の香りがし、移住を検討する人が秋田の情報に触られる温かい空間だと感じた。

昨年末、社会保障・人口問題研究所が2050年に秋田の人口が56万人になるとの推計を公表した。人口の自然減は全国的な課題だが、秋田ではこれに、転入者数を転出者数が上回る社会減が拍車をかけ続けている。この社会減の流れを少しでも変えるため期待が高まるのが秋田への移住促進だが、そもそも都会の人は移住に何を求めるのだろうか。どの調査でも自然の豊かさや生活費の安さなどが上位に挙がるが、都会での生活、

## 移住者が求めるもの

場合によっては仕事にまで見切りをつけて移住を決断する以上、本人や家族にとつての納得感が重要だろう。それまでの生活では得られない価値を得られること、と言い換えてもよい。

自治体がしのぎを削る移住誘致合戦で一步前に出るには、この価値について秋田の優位性を見極め、移住を検討する人に刺さるアピールをしていく必要がある。

一例ではあるが、昨年末、移住・交流推進機構が地方移住に興味がある人を対象に行った調査で、移住先の住宅で優先する条件について、持ち家一軒家が上位になった。その比率は近年高まっているようだ。

秋田は、県のまとめによれば持ち家率も一戸建て率も全国トップ。加えて人口減少で空き家は年々増加する。筆者は秋田に

で支援することも考えられる。筆者は、あるテレビ番組を見て自分でも確かめたくなり、新潟県十日町市の竹所集落を訪ねたことがある。大変な山奥の限界集落だが、朽ちかけた古民家を一つ一つセンス良く再生させた結果、その家や景観に引かれて移住する人が増えている。

また、徳島県三好市の落合集落では、急斜面に点在する茅葺

## 空き家活用を選択肢に

ある。今は人々の価値観が多様化し、大切と考える価値に対しては、より高いレベルを求める傾向にある。どの県も考えそうな全方位的なアピールでは刺さり難い。

赴任して、まず家々の立派さに驚かされた。重たい雪や日本海からの強風に耐えるためだろうか、特に古民家は頑丈に建てられたものが格段に多いと思う。農家の納屋にさえ素晴らしい建

きの家を宿泊施設に再生させている。客は集落入り口の廃校で受け付けをし、自分で運転して目当ての家に向かう。素泊まりでもかなりの料金が数カ月先まで予約が埋まり、海外客を中心に大人気だ。



古民家や、使われなくなつて久しい家を住めるようにするには改修も必要になるが、移住者のセンスで改修してもらい、その費用や技術を移住促進の一環

いずれも仕掛け人は外国人だ。彼らからすれば日本の古民家には大変な価値がある。眺めるだけでも興味深い建物に住んだり泊まつたりして力強い梁を

触り、匂いを嗅ぎ、その地の生活を間近で感じられるとなれば、プライスレスなのだ。そうした価値観は日本人にも広がっており、県内でも古民家をビジネスに活用する方が増えている。何らかの事情で移住を検討するようになった人に対し、秋田の財産ともいえる空き家、中でも古民家を選択肢として示していくことは、キラーコンテンツの一つになる可能性がある。交流サイト（SNS）や動画による紹介も考えたい。

一方で、やむを得ず郷里に家を残り秋田を離れる人もいるだろう。その際、自分は秋田の人口減少の流れに加わるものになつてしまつても、家が移住者の増加に役立つことになれば、気持ちも幾分晴れるのではないかと。私有財産ではあるが、空き家の余地がありそうだ。

〈随時掲載〉